

仏像と密教語の力

真 鍋 俊 照

真言と密呪は語学的にみれば若干違うが、今日では仏像・仏画の前でおがむものの多くは真言と称するものである。真言とダラニは、ほぼ同一に認識されている。そしてインドでは仏像の前でおがむものは真言にしろダラニにしろ、一定の速度をもつてとなえられている。しかも目的（現世利益）達成のためには、語句の強弱も呪者によって発声が意識され区分けされている。真言行者から本尊に向かつて、発せられる語句は、したがって、強弱はなくなり一定の音曲となり、安定してゆく。この安定して落ちつく音階の根柢となる眼前の空間は、本尊を供養するかたちにはかならない。つまり六種供養が配当の根底にあると考えられる。すなわち闕伽^{あか}、塗香、華鬘、焼香、飯食、灯明であるが、これにはとうぜん布施、持戒、忍辱^{にんにく}、精進、禪定、智慧の六波羅蜜が当てられる。これらの所作により行者は空間を支配し、そこにある見えない力を獲得するという発想が生み出される。仏画製作の過程では、この六つの六種供養を行者は動作と同時に意識し

て、仏の顔相を描写することとなる。ほとけの顔の中に人間と同じ目と口と鼻を描写する。そこから仏形は息をふき返すように出現する。絵仏師はこの手で仏に対して六種供養をほどこして、私自身も呼吸をととのえる。また仏画における六種との関連で「六大仏形」という内的なイメージの具現を見出す。これは真言宗でも古義の正説として意味をもつ。両界曼荼羅を正面において祈る場合、したがってその対峙のあいだにある空間を超越することとなる。祈願する側から願いごとを発声すると曼荼羅の画面の中心（遍智院の三角形）は、それを受けとめる。究極、その如来智は「智火」を発する。真言、陀羅尼、密呪はここではじめて受けとめられる。画面は三角形が描かれその中に永遠の生命の象徴の力がひそんでいる。線画の表現は、胎藏界の旧図様では、この力は智火を象徴するため円形でかまれており、内部は赤色すなわち朱色で表現される。辺縁は青色であるが、「現図曼荼羅」で三角形は白色である。「御室版」では四重線（黒線）で囲み「まん

字」の上を智火の表現と思われる上に三種が表現されている。この表現はさらに上辺の智火の上に重ねて、もう一つ描かれる。すなわち、三角形の智火の表現は、内と外の上下に二つ配置されているのである。この二つの三角形は何を意味するのかというと言言となる行者の肉声が正面からここに到達すると二つにわかれるからだ。上は仏、如来の胸の心に、下は腹に声はとどく。つまり遍智院の構図の中に二方向に分裂して声をうけとめる仕組みをかねそなえている。したがって、智火の二面性は正面から絶対的な信号を受けとめることができるのである。かくして正面から上下二つの智火で受けとめられた真言は、仏のからだ全体に通じて真言は言葉でなくなる。そして神秘的な機能に変容する。対峙の構図を一つにまとめるならば、それは如意宝珠となる。仏像と礼拝者は向きあっているが、互いにその間にある存在を意識しながら、あるものを求め合っている。ただその形は円いものなのか、三角形なのか、四角形なのかこの段階では決定することはできない。たとえ、かたちそれぞれに真言による言語（発声することば）があびせられたとしても、造形化するまでにはいたらない。それゆえに三角も四角もかどがとれて「丸み」をおびてくるのである。また、この「丸み」は、おそらく宝珠を暗示する。それは真言・ダラニがとびかう空間においてである。また如意宝珠の想定はもう一つ根拠がある。そ

の中心となる彩色は赤色である。対峙は相対して向き合うわけだから、何か生命力を感じさせる色でしかない。しかも時には人ともとの相対において色自体が輝くことになる。

いいかえると礼拝者には彩色の朱、群青、緑青、黄土、などが真言を発する前面において輝くのである。ところがこのメカニズムは真言の言語の力の中にも介在する。真言という音声の中の形は既に延べた胎藏界遍智院の中心部分の三角形にとつて変わる、その造形表現はやがて「摩尼」がそれに該当する。作例として河内、観心寺の「如意輪観音像」（九世紀）の第二手にその答えがあるが、この位置がマンダラの遍智院と同じ場所である。ここでは火焰が中心で赤く光り輝いている。観心寺像に真言をあびせるとすれば、赤色の智火にすい込まれるようにつながるはずである。これはとくに頼琰が主導する説。私は、仏像・仏画の制作を十三才のときから土佐派の画法をもとに学んだ。「六大仏形」のことがいつも気になっていた。真言密教では仮説として六大を常に相定するが、その必然的な理由の一つは、画像が成立する条件の一つとして大切にされてきたからにはかならない。しかもこの条件設定には仏師や絵師の六大の「識」にゆきつく過程の解釈が必ずあるに違いない。つまり公表されないまま「六大仏形」は、秘密の中にとけ込んでしまつて存在している。たしかに六大体大の中に仏形の真理があると考えられるが、「以

心伝心」というように、その境地は一瞬にして消えることなく存在することは間違いないだろう。仏形の「かたち」や存在感はその容ぼうも含めて、究極のところ言語ではいい表すことができないのかもしれない。しかし平面の絵画や立体の彫像は、表現することの限界まで追求することによって仏師・絵師はその表現と共に格闘することとなる。写経や写仏はその仏教語をイメージ化するまでの秘奥の真意を表現する手段である。とくにその主題は、種々の角度からとらえることが可能である。また同時に主題をとり囲んでいる背景に至るまでの空間は、言葉でいいあらわすには限界がある。そこでその部分を再度、絵画化することになるが結果的に表現の手がかりの多くは、抽象（アブストラクション）的な手法で処理されることが多い。そして正面の仏に現世利益を求めた場合にのみ願いがかなうという仕組みである。利益は別として願文と真言は、行者が発する言葉として独自に機能する。仏像は行者が発声した真言をうけとめるわけだが、話し言葉は願文として本命の真言そのものとなる。心覚の「別尊雜記」には三八五〇種ほどの主要な真言が残されているが、このうち現在なお生きて常用されているものは極めて少ない。また、この中には必ずしも礼拝対象の仏像が眼前に無くても行者には、目的地の途中にある諸堂の前でおがむことも少なくない。比叡山の回峯行では、時間を限定してかなり早口で、

数珠をすり、数多くのお堂をおがむ。とすると仏像と行者の関係は目に見えない真言を通して他力や自力の相即が、その場で瞬間的に対象の救済という身体感覚を生むと考えられる。むろん真言を発信する側での身体の中（こころ）^{なか}には、真言を呪した後の余韻の口中にも、現世利益を達成するだけの「祈願を成就する力」がかくされているからだ。それらはすべて誰でも眼前の仏像に信頼を可能にする秘密の力がかくされている。そのことは、本尊との間にインスタレーション（空間）があるからだ。行者の心はまさにその間を支配することにはじまる。そして対象が平面の場合、画面として受けとめることのできる点のような存在は胎藏界曼荼羅・中台八葉院の中心「一切遍知印」となる。ここは「如来智大印」を示す三角形を描くが「無相・無願」いわゆる三解脱の智慧と正面から対峙することになる。対峙の構図を重視してまさしく、遍智印の中に青色を組み込むことによって、眼前の空間を具体的に奥深くさせる。真言がここに到着するとゆっくりと深々とどめることを意図させる。両界曼荼羅の中心にある三角形は、一切遍智印である。がその内部においては、真言の音声共鳴し行者の口元にまでもどってくる。このくり返しが続く。このときの音は、息をリズムに組みたてられて行者の呼吸と共に目標に向かって、息と音がはきつづけられる。この感覚は自然の呼吸とともに、眼前のもう一つの

世界に入ってゆく。一遍上人は念仏を踊りながら身体を動かしてとねえ続けた。この手法は一見似ているよう見えるが、目的が違う。浄土（あの世）と現世（この世）、しかし真言は浄土の中にもこの世を見ようとする。そして真言陀羅尼の力

によつて、例えば薬師如来では、仏国土で今なお説法し続けていると想定して、その効果は七難八苦をも除去するという。国土に七難があるときに限定し「七難即滅七福即生」〔仁王般若経住持品〕が生じると説く。たしかに真言陀羅尼を説く、この言葉の力のありかを考えると、これをとねえる呪願師の言葉の奥には、力強い除災の意図がひそんでいる。そもそも仏像の前でひざまづきおがみ真言を発声したとき、その声は音は、仏像（如来）の軀内に届き、仏像の中心に向かつてすなわち心所（*चित्त*) に合体するはずである。ここは（心王ともいい識と時と根（器官）に融合する。この状態は、発信した側の行者の心中のメカニズムを通して人によつて状況は多少異なる。しかしその一体感、肉体（行者）の中で確認することができ何度もうのように眼前の仏像に向かったとき、いわゆる祈りの構図は、心の中に何らかの願いがあった、それにとまなう言葉を発して真言や呪文と一つになる。それは無言のままの場合もある。この場合の仏像との距離は、人によつて微妙に異なる。ここで問題にしたいのは、その時の願文の言葉の意味の一つ一つがいかなる回路あるいは

メカニズムをもつて仏像に届くかということである。そして仏像との結合によつて生じるであろう「願」を実現可能にする際の「力」のありかをつきとめることがここにおける目的でもある。

仏像・仏画を正面から見て発声された真言が像の側で受けとめられると、そこで成就されたとしてそのかたちは、宝珠となる。国宝、観心寺の「如意輪観音」には檜の一木造りであるが、「如意輪観音像」は、その河内の観心寺に秘仏として所蔵されているように肉感的な尊容が注目されている。とくに彩色は西院本両界曼荼羅中の胎藏曼荼羅中の同尊に図像に近い。これは一説によれば空海の影響があるとも考えられている。その根拠は両界曼荼羅（東寺本の蓮華部院）の図像に比較することによつて窺い知ることができる。ただしこれと如意輪の真言陀羅尼の結びつきをみると最澄の方がやや早いように考えられる。最澄は延暦二十四年明州すなわち寧波の竜興寺に行った際に五月五日の条で知られるように普集壇法と如意輪法を江秘という（行者）より伝受されているからである。そして五月十八日には中国を離れることになり、七月十五日に帰国する。江秘より伝えられた如意輪観音法の中には、とうぜんのこと、この尊の真言がふくまれていたに違いない。空海の影響をうけたものが河内長野の観心寺に伝来せしめたとする如意輪観音像は今なお伝存する。彫像は国宝で

ある。近年、模像も造像された。彩色の手法は両界曼荼羅（東寺）に伝わる西院本の系統にきわめて近似する。その六臂像の第三手は三弁の如意宝珠を胸前で持している。実はこの宝珠が根源的にみれば空海が後に請来した仏舍利と不思議と深い関係にあると私はみている。「御請来目録」には記して八十粒を伝えていたがこれが基本的には国家鎮護法の中で「力のありか」が形成されてゆくことになる。今日なお続いている後七日の御修法中における真言の具現でもある。

この仏たちに四国遍路の先達をはじめ多くの順礼者が、三十三観音を一つずつおがむ。このようすを毎日ながめっていると涙が出てくる。これは一尊を集中的におがむのと少し違うように感じられる。それは真言をとнаえるときのこの語意の中には例えば因位として描かれている虚空蔵菩薩像の周囲の空間（山岳も含めた）も宇宙に抱括された「場」の一部とみることによって、祈りに必然的な意味が隠されているように思う。それは密教像でいうところの因位の具現である宝珠のことである。これは造形的には金剛界と胎藏界の不二和合の（うしよ）能生の形態（二つのかたち）とみなされている。いわゆる如意宝珠や摩尼宝珠ともいう。「能作性ノ珠」^{のうさしょうのたま}であり、それは形の上辺の三角形は、金剛界の智をあらわし、下辺の半円形は胎藏界の理をおのおの表現している。称名寺第二代劔阿が如意宝珠や能作性塔、南天鉄塔、瑜祇塔さらには室生山を

舞台に舍利埋納への興味をつなげたところとして知られる。このことは東国への虚空蔵求聞持法の伝播がつよく影響している。ここに着目したのが称名寺の劔阿である。一言でいうと「加持感応の実相」を室生山において見たのである。またその造形の具現が如意宝珠である。観心寺（河内長野・国宝）の作例にはその示唆がみとめられる。

如意宝珠に注目したのはおそらく空海であろうと思われる。この根源すなわち真言と仏の関係を私なりに解明するためにパソコンを念頭におく。つまりパソコンを介することによって曼荼羅のシステムの存在を確認することができる。言葉は伝達の用具だけではなく、「言霊」と同様の意味を濃厚にもっている。ところがコンピューターの構造は大小はともかく、そのシステムは、入力と演算と記憶と制御そして出力という順序で成りたっている。これは我々が使っているパソコンをモデルに考えれば、いとも簡単に理解することができるよう。演算と記憶はコンピューターの要である。とくに演算は情報を入力すると同時に何が知りたいか、を提示しその答えに向かったちどころに必要なシステムが作動しはじめる。コンピューターが動き出すと作動する基本システムは、数字による計算がベースにあると。「アンド回路、オア回路、ノット回路」の三つの機能が基本である。この三種はのちにトランジスターやダイオードを用いてつくられていることを

知った。このことがマンダラとどうかかわるのが私にとつて大きな問題であつたのである。とくに両界マンダラのうち、この三つの回路をシステムとしてマンダラに内蔵されているのは、胎藏界である。一見、金剛界のように見えるが、実は女性的原理の画面をもっている胎藏界なのである。場所はどこか、というところと種々な見方があるが、図像学的には中央の中心である中台八葉院のすぐ下の持明院である。このコンピュータ上の「規定」をよりどころにして、行者の全身をめぐる気の脈絡にあてはめてみると、身体の気と血液の流れに支配されていることに気づく。つまり真言は身体（行者）でうけとめられると同時に真言の意味に対しては何らかの反応を示すはずである。行者は両手に印を結びさらに祈願に呼応し、その目的に導く。行者の方で対をなす金剛界マンダラが構造的に答えを用意している。実は既述のコンピュータのアンド回路・オア回路・ノット回路が、金剛界マンダラの九会の分割画面をつなぐシステムの中で内蔵されていると私はみる。ここでいうシステムとは、一貫した組織の体系をいう。また方法すなわち「方式」や一定のものを成すに当たつての方則も真言の意味の範ちゅうに入るからシステムの具現は行者の心の中で処理される。行者の人体をみると気の発源は中焦であるから修行のシステムともほぼ一致する。真言と言葉の関係もある「きまり」があることに気づく。その

「きまり」とは企画力にも由来する。ひらがなを漢字に置きかえる、という変換システムがパソコンの機能から既に予測（予知）を可能にしている。その変換の早さは、パソコンのコンバーター（converter 変換装置）は人知をはるかに越えて一瞬である。プログラミング言語を文字けんさくで置きかえ可能にして、必要な語を瞬時にひろい出せばいいことになる。真言の多くは修行者によつて記憶されている。発声する時点で、その体内にとどまるが、おがむと同時に仏像等にとどく。この場合の記憶力とは、人間が一度覚えたものを時と場合（目的）によつて、用途別（真言の目的）に対応させることができるというものである。真言密教の最大の目的である即身成仏の境地は現世利益と共に「理具成仏」、「加持成仏」、「顕得成仏」の三つから成りたつてゐる。しかしそのいちいち、区分けして成仏を想定することは明確ではない。むしろ記憶したものは、文字化してあとで説明することができ。しかし、この境地は、真言の持誦とは別の問題である。ところが一般的に考えて、「成仏」そのものは一つである。したがつてこの三つは、成仏を実現する方法から導き出された境地の解釈である。それはパソコンの記憶容量などから考えてもその多くは通過の一時的な儀礼であるように思われる。即身成仏を達成しうするためには、この二つ三つとは別の要件を見出さなければならない。となると即身成仏とは、いった

い何か。その境地の範囲が問題となる。範囲は広くて深い
が、答は一つしかない。つまり境地とは一点のみなのであ
る。この一点のみという「即身成仏」という結果をコン
ピューターで計算し結果を出すというメカニズムは、行者の
中には真言をとなえることに集中するという絶対条件が組み
こまれている。

「あつというまの瞬間の中に真言のエッセンス」がある。
ただしそのエッセンスは、どうやら聞くことはできるが見る
ことができない。そこで真言と仏像の關係が注目される。真
言という言葉は意味もふくめて仏の全身に投げかけられる。
仏像（ほとけ）も行者も感じるだけである。そこで自分は感
覚があるということを見出す。「ああ、そうだ」を身体に
いい聞かれるように感じることの喜びに近い境地を見出す。
マンダラの画面のその感覚的な存在彩色と線画をたしかめる
ためのテストケースのような図解である。線と色で仏の「あ
る」かたちを表示している。「ある」かたちとは、いうまで
もなく、「仏のすがた・かたち」である。行者である人間は、
さまざまな「業」を背負っているから、それが不思議と見え
てしまう。「業」が見えてしまつてはともともこないから、
それをかくそうとする。したがって、人を描かないで、「仏」
のすがたに託してそれに言葉や真言を与えて表現する。既述
の如意宝珠もその一つである。仏像の胸前で宝珠をいだくよ

うすは、そのまま仏の方の真言到達点が中医学の視点で示す
と体幹の全体にまたがる三焦にゆきつく。三焦とは水の通路
のようなもので、全体に脈絡がありつながっている。この脈
絡（気）を仏像の像容にあてはめてみる。すると諸仏・諸尊
は梵字で表現された両界種子曼荼羅の例になる。中世以降、
真言が観念を超越し定形すると象徴的な技能が回復される。
すると真言の音声も影響をうける。またマンダラの梵字の文
字表現としてあらわす方法がある。この例の有名なものは空
海が中国から八〇六年に持ち帰った「真言五祖像」（国宝）の
真言五祖の肖像の名前を梵語名で墨書したものがあつた。これ
は人物像の中に本誓も包括したものと考えられる。セットに
されたものとしてはもつとも古い。コンピューターの文字表
現にあてはめれば伝持の八祖中の五祖だからマシン語に該当
するであらう。ただ五祖や八祖の名は、真言密教のさまざま
な伝承を考える場合に、きわめて重要な名称である。八祖の
うち五祖の名をとなえる場合に、とくに飛白（ひはく）の表現は、五祖
の人名の飛白の表現によつて、人名の中に真言という言葉に
上の力を内に秘めていることを示している。

おそらく空海自身はある光りを受けとめていたのではない
か。しかもその人名は真言以上の力をとまなう。その關係は
一瞬にして可となる。仮に空海の身体がコンピューターだと
するならば、人間がコンピューターの間でシステムであると

する発想が、また同時に仏と空海を入れかえることも可能である。それほど空海の身体は虚空蔵求聞持の修法の力によって変身しうるのである。パソコンの変換機能にはそのメカニズムを読み解くカギがあるように思われる。いうまでもなく通常の変換システムの多くは、数字計算による複雑な解析の構造によってなりたっている。しかし虚空蔵は受容の量の能力をみると広くて深く能力も超人的である。パソコンと虚空蔵菩薩のシステムが似ておりこの点は空海の中にコンピューターの構造がすでに内蔵されていたとみる見方が成りたつ。虚空蔵求聞持法の修得はそのことをよくあらわしている。「記憶」力の増進を目ざした修行は不二と実感し、さまざまな修法を真言行者が行えばそこには結界内の不思議な力が作用して思いもよらぬ結果をもたらす。ただしこの結果は験と証して予期せぬものであるから、想定外のもの（存在）かもしれない。コンピューターは結界された人工的な箱（パーソナルコンピューター）ではあるが、予期せぬものを導き出すというシステムは無い。その大多数はすべて予想されるものである。数字の組みあわせを含めて、予測が命であるから原則的には想定内外の結果を得ることになる。またコンピューターにおける記憶用の半導体メモリーでは、いったいどのくらいデータを記憶できるのか、が装置として機能をひもとく鍵となる。記憶装置としての半導体は、コンピューター発

足当初は五〇〇ビットくらいだったが、その後二〇〇ビット（二キロビット（Kビット））となり、使用数も大きく進展した。そしてさらに大容量化され、現在の集積度の進んだエルエスアイは四メガビット（Mビット）まで量産されるようになった。このメガという単位は一〇〇万を意味する。密教修行の苦行の一つ、虚空蔵求聞持法は、虚空蔵菩薩の真言を一〇〇万回、五〇日で唱えるのが目的とされるからエルエスアイでは四〇〇万ビット、二進法の四〇〇万桁分の一個のエルエスアイの中に記憶させることができる。このビットの単位を基準にして虚空蔵菩薩の真言を唱えるという訓練の回数は一〇〇万回であるからまさに不眠不休で行わなければならぬ。そのような意気込みで修行者の身体内に記憶させるわけである。この一〇〇万という単位が少なくとも行者と礼拝対象の仏像（虚空蔵菩薩）をセツトとして位置づけた「記憶装置」すなわちコンピューターの記憶力の一単位に位置づけられているのは興味深い。コンピューターの記憶の単位は例えば漢字は2バイトで16ビットに相当するから単純にこの16ビットでだいたい漢字を記憶可能とする。したがって人間の脳は途方もないビット数で記憶力ばつぐんなのである。両界曼荼羅のうち胎藏界は約四一〇尊の仏があり、それに修法をする行者は各尊に真言を一つ一つ認識させ、唱える（声を出して行者自身が自ら、身体で認知する＝密教用語は観念する）か

ら膨大な数になる。さらに虚空蔵菩薩を因位の童子形とする解釈は『御遺告大事』の図像化という過程の中で再認識される。ここではじめて密教語の力となる。仏像と真言が数多く流布していった、その背景には、関係する仏像が、既述の如意輪観音や五大尊などとともに醍醐寺五重塔内に両界曼荼羅として、立体化した画面を必要としたからである。

（補足）

「真言五祖像」のうち、各図縦二二・七×幅一五〇・九センチメートル。（一）龍猛像、悉曇梵字が認められる。但し六〇七行の墨書があるが上下が破損しており、全容は不詳。（二）龍智像、伝記が上半は無いが二〇行ほどの下辺に残っている。（三）金剛智像、伝記の大部分は破損。梵字が上辺右辺に飛白体で梵字が認められる。（四）不空像、保存良好で「不空金剛」と二行で漢名がある。右側に梵字を飛白体で示す。（五）善無畏像、漢名を二行で書きともに悉曇梵字で示す。伝記は約半分が残っている。問題は画面に飛白体で書かれた文字表現である。それは真言を唱える密教語以上の存在感を示す。そのような字形の中に不思議な言霊以上の力を感じさせる。

（キーワード） 空海、真言、虚空蔵菩薩、両界曼荼羅

（四国大学名誉教授・博士（文学））

仏像と密教語の力（真 鍋）

新刊紹介

竹村牧男 著
全国良寛会 監修

良寛「法華讃」

A 四版・二三二頁・本体価格二、五〇〇円
春秋社・二〇一九年五月